（別紙１）　　イ ベ ン ト 活 動 実 績 報 告 書

団 体 名	むつろみ（館）	活 動 名	静詠

１　活動の実施内容

①　実施場所（地域）	②　実施期間
坂越 妙道寺 兵庫県赤穂市坂越 1444	自　2023 年　9 月　17 日 至　2023 年　9 月　18 日

③　実施体制

・団体構成員　5　名　・一般参加者　50　名　・ボランティア　　名

・チケット購入者　16　名　・↳チケット購入者も含む　名　　計　55　名

④ 活動実績（実行委員会や準備作業の活動実施等の主な実施日、内容をご記入ください。）
コロナから回復し、各地域の観光業にも注目が戻ってきました。
今回のイベントのコンセプトを考える上で我々は、
観光客の方の多くは普段の忙しない日常からの
解放と癒しを求めていると考えました。

そこで我々は坂越が持つ自然と歴史が調和した静かで美しい雰囲気という
地元民からしたら当たり前の様でそうではない特色を多くの方に届けようと
考え、この度「静詠」を開催しました。

なお、この「静詠」においては地元民の方も市外の方も一人の観光客として捉え、
空気感、情景というありふれたところから赤穂の魅力に着目し、発信・再発見する
という意図も含めて開催しております。

以降、「準備段階」「広報活動」の2項目に分けて
イベントの実施までの経緯を報告します。

「準備段階」
5月2日（火）　妙道寺への挨拶とイベント内容の説明

事前にアポをとり住職である楠さんに自己紹介とイベント開催の提案をしました。
妙道寺を選んだ理由としては、人々に「癒し」を与えるという機能を元来果たしてきた
「お寺」という場所に大きな魅力を感じたからです。
さらには檀家さんも多く、かつては赤穂初の寺子屋としても活動されていた地域のハブ的な
役割を持つ妙道寺で開催することに大きな意義を感じたためです。
楠さんには来場者数に不安を感じつつもご快諾頂きました。

5月9日（火）ANCHOR KOBE 学生会員への提案とメンバー集めの実施

神戸新聞と神戸市が運営するコワーキングスペースである「ANCHOR KOBE」の
学生会員にイベントの内容と意図を説明し、メンバーに加わってもらいました。
4月に全員で赤穂観光していたこともあり全員が赤穂に都市にはない魅力を感じていたため、
快く参加してくれました。
参加メンバー　白数夏生　船越丈弘　菅野駿貴　中谷晴

5月31日（水）高砂 Tentofu さんに絵本貸し出しのお願いとイベントの説明を実施

高砂にて古民家をリノベーションして Tentofu というブックカフェを営んでいる
衣笠さんにイベントの内容を説明し、絵本の貸し出しをお願いし、ご快諾頂きました。

6月9日（金）イベント開催日の決定

電話にて妙道寺さんのスケジュールと擦り合わせを行い、
イベントの開催を9月17日（日）、18日（月）に決定しました。

上記の日程を選んだ理由としては、シルバーウィークの中日である
17日には市外の方、最終日である18日には地元民の方が多く
来客すると予想したからです。

6月28日（水）イベントのコンセプトの明確化と開催リスクの確認

イベントのコンセプトを
「お寺という非日常の空間でゆったりとした時間を過ごしてもらう」とし、
メンバーと協議し、以下のリスクについてまとめました。
・駐車場の不足
・不審者への対応
・雨天時の決行方法

7月2日（日）提供メニューの検討及び広報宣伝活動の決定

飲み物の販売を伝馬船さんに依頼。
広報宣伝活動法をSNSによる発信と地域誌への掲載に決定
以下はそのための使用媒体です。
・Webサイト
・Instagram
・facebook
・DMOと連携した記者クラブへの記事提出
なお、SNSへの投稿のための写真や動画の撮影を行うことを決定しました。

7月3日（月）広報用Webサイト、写真、動画の作成を担当者に依頼

Webサイト、写真、動画の作成を東京でデザイナー兼俳優として活動している
諏訪太一氏へ依頼しました。
Webサイトや動画、SNSで必要となる素材の撮影を7月26日（水）、27日（木）
に実施することを決定。
撮影日当日のスケジュールを調整し、坂越、赤穂御崎を
中心に撮影することを決定しました。

7月26日（水）27日（木）撮影会実施
（参加者）
中西 壮　：むつろみ代表、プロデューサー
白数 夏生：むつろみメンバー
諏訪 太一：ディレクター兼撮影者
杉本 葵　：モデル

（当日スケジュール）
26日
11:00　姫路駅集合
12:00　赤穂入り（伊和津比売神社 着）

12:10　赤穂御崎撮影開始

丸山海岸、キラキラ坂、遊歩道、赤穂御崎公園、大塚海岸

15:00　赤穂御崎撮影終了
15:30　坂越撮影開始

街並み、旧坂越浦会所、大避神社、妙見寺

17:00　撮影終了

27 日
10:00　東横イン集合、スケジュール打ち合わせ
10:30　坂越入り
10:40　妙道寺撮影開始
13:00　坂越街並み撮影開始
16:00　撮影終了

7 月 29 日（土）Web サイト、インスタアカウント完成

8 月 1 日（火）Web サイト、Instagram、facebook にて宣伝活動開始

2 日に 1 投稿で宣伝を開始しました。
Instagram と Web サイトの運営には今回ディレクターである
諏訪太一氏へ引き続きお願いしました。

8 月 16 日（水）坂越公民館、図書館への挨拶とイベント実施にあたっての説明

坂越公民館へイベントの実施の報告と駐車場を貸してもらうための
お願いを目的に向かいました。
イベントに関しては了承して頂き、書類を提出すれば駐車場の貸し出しは
許可されるという形になりました。

図書館へは不要になった本の引き取りに関してのお願いを
目的に向かいました。
不要になった本の譲渡に関しては、時期の問題もあり今回は難しいが、
次回の開催から譲渡して頂けることで話は決着。

8 月 18 日（金）坂越まち並み館、坂越のまち並みを創る会 会長寺井さんへの挨拶

イベントの開催にあたって寺井さんへ挨拶と当日の説明を行いました。
地域住民への呼びかけや説明を行っていただくという話でまとまりました。

9 月 1 日（金）イベントリハーサルの実施

妙道寺にて実際に椅子や机を設置し、当日の流れを確認しました。
設置まで約30分かかることを確認。
風向きを考えて、縁側のどの位置に椅子を配置するかを決定しました。

9月5日（火）DMOへ記者クラブに提出するための記事を提出

9月6日（水）公民館へ駐車場に関しての打ち合わせへ向かう

当日想定される来客数を考慮し10台分のスペースの確保をお願い
したところ、坂越公民館の駐車場を無料で貸して頂けることになりました。

9月14日（木）最終イベントリハーサルの実施

当日の荷物の搬入を兼ねて、最終リハーサルを実施。
住職 楠さん立ち合いのもと
お客様への接客方法と当日の導線を確認しました。

「広報活動」

イベントの目的上市外の方だけでなく地元民への呼びかけも重要になってくるため、
ターゲットによって広報活動を変更しました。
市外の方へは主にSNSを使って呼びかけを行いました。
（Instagram、facebookへ2日に1投稿の頻度で呼びかけ）
またANCHOR KOBEに在籍する神戸の企業や学生にプレゼンやスピーチを行い、
実施にあたってのアドバイスや専用チャットでの告知をさせて頂きました。

地元民へのアプローチにおいてはできる限り「目に触れやすくする」「口コミの効果」を
意識し、地元誌や回覧板への応募、地域のハブになる施設（公民館、図書館etc)への
挨拶と説明を行いました。
その際、以下の3点を意識して説明を行いました。

・地元民が地元を愛していない土地は繁栄しない。なのでまずは地元民に
　赤穂を愛してもらいたい
・新しいものを創るのではなく、今あるものの活用の仕方を工夫する
・赤穂の風情、雰囲気を作ってきた地元民の尊重を第一とする

という3点を意識して説明を行いました。

DMOと連携した結果「神戸新聞(9/13掲載)」「赤穂民報(9/9掲載)」「赤穂新聞(9/10掲載」
の3社に告知記事を掲載させて頂きました。
神戸新聞においては事後記事も掲載して頂きました。(9/18掲載)

2　活動実施の成果と今後の課題

①　活動実施の成果

9月17日（日）、18日（月）に無事イベントは開催できました。
天気にも恵まれ虫の声や海の方から吹いてくる潮風や、それによって揺れる木々が
イベントの雰囲気をイメージ通りに彩ってくれました。
そのお陰もあってか2日間で見学も含めて約50人以上の方が妙道寺に入って来られ、
イベントに参加して頂きました。
ブックカフェ自体には大人14人、子ども2人の計16人が参加し、その多くは地元の
文学愛好家や主婦層が多くおられました。
中には三重県や京都府、広島県という遠方から来られている方もおり、
「イベントをきっかけに赤穂に訪れた。静かで落ち着いた空気感の中での読書は
　一瞬で時間が過ぎ去るものだった。」と仰ってくださいました。

参加してくれた地元の小学生の男の子は
「読書は家だと集中できない時があるけど、ここだとスッと頭に入ってきた」
と本殿にて真剣な顔で読書に没頭していました。

またイベント自体には参加しなくても、入口のイベントの看板をきっかけに
妙道寺に参拝し、縁側などで休憩する観光客も30人程度おられました。
多くの方が「こんな場所があるなんて知らなかった。とても静かで
リラックスできる場所だ。」とお寺を堪能されていました。
そして、イベント終了後地元の方からのお誘いで坂越の舟祭りにてお神輿を担がせて頂きました。イベントをただ開催しただけでなく、それをきっかけに地域住民の方との関係性を構築し、仲を深めることができたことは次の活動に繋がる大きな機会になりました。

② 今後の課題

今回のイベントは我々にとって大きな一歩となりました。
市外の人だけでなく、赤穂市民の方にも赤穂が持つ地域資源の魅力を
発信できて嬉しく思います。
しかし持続的に活動を続けていくためには、
「イベントのクオリティ」「これからの運営方法」にまだ改善点が存在します。
これから上記の2項目に分けて課題をまとめます。

「イベントのクオリティ」

・静かな雰囲気を出すことができたことは良かったが、
子連れの親御さんが「周囲の迷惑」を理由に参加を躊躇されていた。
「静かな雰囲気」というイメージを推し過ぎると子どもの参加率が低下する可能性あり。
これから子ども達が参加しやすくなる PR 法を検討すべきである。

・書籍の確保
今回はメンバー各自の所持品やレンタルなどで対応したが、このままでは持続性に欠ける。さらに、イベント参加者の中には本を持って帰ることを希望する方も多かった。
よって次回からは地域で不要になった本を集めたり、図書館と連携して本を確保するなど、
本で地域に新しい循環を生む仕組み作りが必要である。

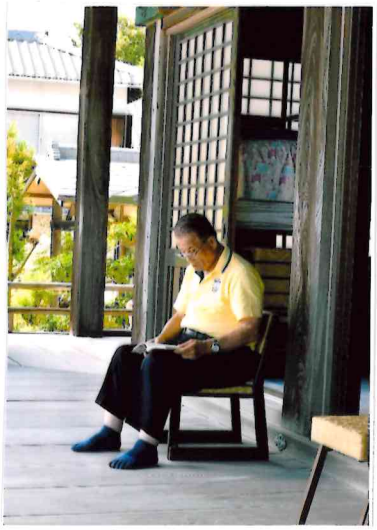
「これからの運営方法」

・今回のイベントの成功は新しいものを創るのではなく、今ある地域資源を地元民と協力しながら活用したことに大きく起因している。そのためこれからの活動においてもまず「今ある地域資源を風情、雰囲気を残したままどう活用するか」という視点で考えていきたい。

・活動を持続的に行うにあたって、地域におけるプレーヤーの数を増やすことは急務である。そのためにリーダーがいなくても地域の中で活動が続いていく様な仕組み作りを
行っていく必要がある。

・イベントに参加してくれた地元の方から「赤穂にこんな場所があるなんて知らなかった」と言われた。推測だが、まだ地元民ですら赤穂の魅力に気付いていない可能性がある。
そのためまずは地元民が赤穂を好きになり、誇れる様にするために寺子屋や団らんの場といった地域住民同士がコミュニケーションをとることができる場所から作っていく必要がある。

3　実施活動の写真

	写真のコメント 妙道寺の境内の様子。ただ本を並べるだけでなく、机の配置を御本尊様を起点に放射線状に　配置しました。　目的としては境内に入った時に、自然とご本尊様に視線が向かう様にするためです。
	写真のコメント イベントに参加してくれた子どもたちが真剣に読書をしてくれている様子。普段はなかなか集中できないそうですが、お寺の雰囲気のお陰でスッと頭に入ってきたそうです。あまりお寺に来ないので少し緊張していたそうです。
	写真のコメント 赤穂民報の記事を読んで興味が湧いたため来られたという地元の読書家の方。妙道寺自体は初めて入られたそうです。お寺の中での読書が新鮮で気づけば 100 ページを一瞬で読んでしまったそうです。

4　参考資料を自由に添付してください。

※　用紙が不足する場合は、欄の大きさを変えるか用紙を追加してください。
（ただし、別紙４全体で、用紙Ａ４サイズで５枚以内としてください。）

静かに読書する 静詠の参加募集

17、18日に赤穂・妙道寺

赤穂市坂越にある妙道寺の本堂で、静かに読書をしながら過ごす催し「静詠（しずよみ）」が、17、18日午後1～6時に開かれる。

赤穂市在住で、慶応義塾大学通信教育課程文学部で哲学を学ぶ中西壮さん(22)が代表を務める学生団体「むつろみ」が主催。地元にある非日常な場所で、ゆっくりした時間を通して自分の人生と向き合ってもらおうと企画した。

「心を豊かにする」とのテーマで、学生メンバーが選んだ絵本やエッセー約100冊が置かれ、本堂や縁側で自由に読める。中西さんは「情報があふれる現代で、『人生の休憩所』となるような空間にできれば」と話している。

中学生以上500円、小学生以下200円。コーヒー牛乳などのドリンク販売もある。中西さん☎070・2324・1359

心地よい静寂の中で読書

本堂で読書に浸る参加者＝妙道寺

妙道寺で「静詠」、本の世界に浸る

赤穂

静かに本を読みながら人生と向き合う催し「人生の休憩所―静詠（しずよみ）」が17日、赤穂市坂越の妙道寺で開かれた。ゆったりと時間が流れる本堂で、幅広い年代の人たちが本の世界に浸った。

慶応義塾大の通信教育課程で哲学を学ぶ中西壮さん(22)＝同市＝が代表を務める学生グループ「むつろみ」が初めて企画。「心を豊かにする本」をテーマに絵本やエッセー、哲学書など約100冊を持ち寄り、自由に読めるようにした。

時折、虫の鳴き声や小鳥のさえずりが響く心地よい静寂の中、来場者はページをめくりながら本の世界へと入っていった。坂越小4年の江崎航大君(9)は「家だと集中できない時があるけど、ここだとスッと頭に入ってきた」と真剣な表情で絵本を読んでいた。

中西さんは「一度立ち止まって生き方を見つめ直すひとときを提供したい」と

1枚めくると「広畑新聞」

「男やもめ」ら食堂で交流